



「苑」この人に会いたい
落語家 桂 歌丸さん(69歳)

桂

歌丸

「どんなバカげた噺にも
教えが入ってる。」

それが落語の面白さなんです」

とある日の浅草演芸ホール。寄席を終えた歌丸さんを楽屋で待つ。厳しい方だろうか、などと少々固くなりながら正座していると、「どうも、お待たせをいたしました」とにこやかに現れた。テレビで見る『笑点』そのままの笑顔である。一気に楽屋内が明るくなった気がした。「どうぞ足くずして下さい、疲れますからね」と気さくに声をかけてくださる。

我々にとって一番多く目にする歌丸さんは、人気長寿番組『笑点』でのお姿だろう。大喜利のオーソリティーであり、さしずめ知恵の塊。

放送第二回からのメンバーで長きに渡り、お茶の間に笑いと和みを提供し続けている。

ただし、それは落語家としてのほんの二面。独演会や寄席をこなしながら、その肩には落語芸術協会会長としての使命も背負っている。落語「筋」に生きる「桂歌丸」に迫ってみた。



小学校4年の時から、 噺家になることしか頭になかった

「笑いの少ない時代でしょ。今みたいにテレビもないし。NHKラジオで週に2回だけ寄席の番組があつて、もうこれが楽しみで。アタシの大師匠の古今亭今輔、先代の金馬師匠、志ん生師匠みたいな昭和の看板がお客さんを大笑いさせるんだ。どうせなら人を笑わせる商売をしたいって心底あこがれた。」

「あたしらの時代はね、噺家の99%は

落語が好きで噺家になるんですよ。噺家になることしか頭になかったですね。もともと人を笑わせることが好きでしたから。」

ラジオからは漫才も流れていたが「漫才は2人でやらなきゃならないでしょ。ほら、わがままだから(笑)。ギャラ2人で分けるのも嫌だ。」

「小学校を出たらすぐ落語家になりたかったんですが、祖母に“中学だけは出てくれ”って言われまして。中学に入ってから入門して、休みの日に師匠の所へ行つて

噺の稽古をしていました。」

「戦後ですからね、雨が降ったら生徒がみんなの前で自分の好きなことをやるようになったんですよ。そこで私は落語をやったんです。これがバカ受けでね。そのうちに評判になって、よその組からも迎えに来るようになりました(笑)。」

近所の富士子さん(妻)

祖母の顔を立てて中学へは行つたが、待ちきれずに3年在学中に古今亭今輔に弟子入りした。

“好きな道に進むのが一番”と送り出してくれた祖母は、翌年心臓発作で亡くなった。

16歳で独りぼっち。独りぼっちが嫌で、結婚も21歳と早かった。

「今輔師匠が紹介しようとしていた女性が多かったく好みじゃなくてね(笑)。つい『好きな人がいます』って言っちゃって、ご近所さんだったから声掛けた。」

面白くて教えが入っている、 それが落語の深さと魅力

「落語にはね、どれほどバカバカしく思える噺にも、必ず教えが入っているんです。例えば“人を助ければこういう救いがある”あるいは“人を騙したりするところ”という報いがある。”“人の真似をするとこう

いう失敗がある”とか、人間が生きていく上で役に立つ教えがね。だからうちで稽古をしている時に、“そうか、こういう教えがあるんだから私生活じゃ弟子にこういうこと教えなきゃ駄目だな”という具合にふつと気が付くことが今でもありますよ。自分でも反省したりしますしね。落語は深いよね。」

海外での公演

「そう、もつと世界にも広めていきたいですね。海外公演はかなりやってるんですが、相手は99・9%日本人だったんです。それじゃ国際的にならないでしょう。それで去年初めてうちの協会が文化庁の要請で、手始めにトロントとニューヨークでやったんですよ。4割は外国人でしたけど、日本語でやりましたよ。字幕を出してね。外国人の方も笑ってたんですけど、実は大失敗があつたんです。」

「ほら、日本語と文法が違うでしょう。だから字幕で下げが先に出てきちゃうことにその場で気が付いたんです(笑)。でもね、失敗は成功の素だから今度はそうしなきゃいいんですよ。だから今度ネタは決めとして、プログラムに筋と下げの意味だけを書いておこうと思ってるんです。来年はパリとロンドンでやる予定ですから、今度は成功させようと思っています。」

落語は日本文化

「外国にも漫談、あるいは漫才形式のものはあるんですが、落語は日本にしかないのですからね。着物という民族衣裳があつて、落語はそこから上の仕事でし、世界中に広めていかなきゃいけないんじゃないかって思います。そのためにも噺家は職人でなきゃいけないと思うし、職人でありたいと思いますね。」

互いに学び、高め合う 落語と歌舞伎の深いつながり

「年寄りっ子なんで、子供の頃から祖母に連れられて歌舞伎を見に行ってたんです。今でも月にいっぺんは必ず見に行くようにしています。」

「型を盗みに行くんです。我々の商売は小道具が扇子と手拭しかないですから、その使い方を勉強するんです。キセルにしても、吸い方ひとつで違いますからね。侍、町人、あるいは馬方。全部違うんです。」

「あとはね、セリフの間ですか。歌舞伎も最近、ちよつと芝居がかつた噺も手がけているので、見ているとどんな場面にどういう鳴り物を入れたらいいかわかるんです。歌舞伎役者とも付き合がありますから、わかんないことがあつたら聞きに行っちゃいます。刀の持ち方とかいろいろ教えてく

れますし、逆に歌舞伎の役者衆も落語ききにくる方いらつしゃいますよ。」

「昔はもつと落語家と歌舞伎役者って交流があつたんですが、今はお互いに忙しいですからね。話しに聞くと歌舞伎役者でもずいぶん落語がお上手な方いらつしゃるそうですよ。名前は出しませんが、いっぺんある歌舞伎の役者衆とコラボレートしたいなと思ってるんです。」

大喜利の歌丸では終わりがたくない。 噺家ですからね

1966年にスタートした『笑点』で大喜利レギュラーになり、林家こん平と共に最古参。初代司会者の立川談志に誘われたのがきっかけだった。それから40年が経とうとしている。

「新宿・末広亭近くのラーメンが1杯50円だったころ、寄席の給金は1日1500円。電車賃を引くと、ほとんど残らない。電気も水道も止められ、2人で化粧品のセールスや、マッチ箱の内職など何でもやっ

た。」

「どうにか3食食えるようになったのは40近くになってから。みんな笑点のおかげですよ。」「談志さんには恩義を感じてます。口には出さないけどね(笑)。」

「大喜利は昔からあるもので、噺家の専売特許なんです。だから今、私たちが笑点

interview 苑



で大喜利をやっているのは、落語の入門書だと思ってるんですね。『笑点』をテレビでご覧になって、「面白いから、じゃ今度は落語を見に行ってみよう」という人が増えてくれることを一番望んでるんですよ。ただ困るのは大喜利のイメージが強すぎて、独演会をやつてると「今日は一人ですか」「なんて言われたりするんですよ。でもね、知らない人がいていいんです。そういう人が私の独演会を聞いて「落語は面白い」と思って落語に入ってきてくれれば、ありがたいじゃないですか。」

『笑点』は入門編で、独演会は本来の落語家としての場所でもあるんですね

「ただですよ。私は大喜利の歌丸では終わりたいじゃないんです。噺家ですからね。『笑点』では桂歌丸を宣伝してもらって、お金をもらってると思ってます（笑）。」
まじめで負けず嫌いだから「テレビの歌丸」と言われることが不本意だった。「落語の歌丸」に立ち戻ろうと、74年に横浜・三吉演芸場で独演会を始めた。埋もれた古典落語を

こつこつと発掘し、毎年披露して30年になる。発掘した古典は150を超える。三吉演芸場に閉鎖話を持ち上げれば「残す会」を作つて存続させた。

夏は大師匠がたのお墓参り。
これが毎年の恒例なんです

「うちでは迎え火、送り火を必ず焚いてます。近所ではうちだけになっちゃいました。仏様にお初のものとお花を飾つて、お迎えして、お送りして。去年、表でやつたら通る人が「何やつてるんですか」と。迎え火ですつて言ってもわからないんです。そういう風習が残ってる地域も多くあると思うんですけども、都会じゃやなくなっちゃいましたね（感慨深げ）。」

「うちにいる限りは朝、昼、夜と3回仏様に手を合わせますよ。今日はありがとう、ございました」とかね。お寺さんや神社の前を通つたときは「失礼します」つてこうやります（お辞儀）。祖母から教えられたことなんでね、自然と出ちゃうんです。」

「円朝師匠（三遊亭円朝）のお墓参りに行きます。命日が8月11日なんです。毎年、落語協会が『円朝祭』というものを谷中の全生庵でやるんですよ。これに協会の代表として毎年出かけます。お経をあげてお参りをして、今年も師匠の命日にやらしていただきます」つて言つてね。その帰

りに四ツ谷の左門町へ行つて、私の一番の元をこしらえてくださった古今亭今輔師匠のお墓参りをするんです。これが毎年8月11日の日課ですね。」

「夏の恒例がもうひとつあったな。9月3日が円生師匠（三遊亭円生）のご命日なんです。それはなぜかというと牡丹灯籠にしろ、色々とお手本にしたのが円生師匠のものなんです。だから8月下旬の日曜か土曜には必ず、烏山の方にあるお墓へ行きます。自分の家の墓参りもしますけどね。」

自分なりの噺を残したい。
そして落語をもっと広めたい

「基本は自分なりの噺というのを残しておきたいですね。先人が残してくれた伝統をお手本にしながらアレンジを加えて、自分なりの噺というものを残しておけば、何年か先にうちの弟子なり次の世代の人がまたアレンジしてやりたいようにやつて、永久に続いていくでしょうから。それはもう芸の上での夢ですね。」

今年3月には2004年度芸術選奨

文部科学大臣賞（大衆芸能部門）を受賞した歌丸さん。独自の芸を確立し、その功績が認められた証である。気さくで話し好きな笑顔の根底には「落語を愛する」気持ちがいっぱい。